



石飛博光創玄書道会理事長と加藤裕書玄会会長



壁一面に飾られた色紙サイズの作品群は、一つ一つが観る人に呼びかけるようであり、またそれらは一つのまとまった大作にも見えた。会場中央には、月をイメージした黄色いモバイル作品が頭上からゆったり揺れ動き、来場者を優しく包んでいた。

お忙しい中、ご来場いただきました東海創玄の先生方をはじめ、諸先生方に厚くお礼を申し上げます。

第49回 書玄展 『山月記』を読む」

と き:平成 25 年 3 月 20 日 (水・祝)

~24 日 (日)

ところ:名古屋伏見 電気文化会館 5 階

西ギャラリー

第 4 9 回展は、例年と会場を変え、名古屋市中区栄の電気文化会館 5 階西ギャラリーにて開催された。

今回は、加藤裕会長が文学の教えを受けた永畑恭典先生推薦の『山月記』を読むことから作品作りが始まった。

『山月記』は唐の伝奇『人虎伝』を素材にし、虎になった男の悔恨の情や友との友情を描いている。

「物語をどう読み、どう表現するか。書は、心の中の葛藤を直接ぶつけるばかりでなく、幅の広い表現方法を模索し、三千年の古代から幽遠な未来に続くものでありたい」と語る加藤会長の言葉に、悩みつつ楽しみながら会員らは挑戦。

大学生から 9 0 歳を越す会員の 2 5 0 点が広い会場を飾った。

小説の一節を書いたもの、そこからイメージした漢字を力強く書いたもの、虎の絵を書き添えたもの、1 5 0センチの四方の作品もあった。

(後藤汀華 記)